

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二―九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

くもくぐく

■巻頭言■

出会い、国鉄闘争と連帯する会

岩井章さん生誕100年、没25年(1)

山下 俊幸：2

労働運動(春闘)再構築

―日本労働運動の過去・現在・未来(上)―

滝野 忠：4

資本主義的合理化

―カール・マルクスと向坂逸郎(5)―

原野人：7

「原発」今や日本の焦点!

―目に見え、耳に聴こえる運動に―

沢井 清：8

◇信州松本通信◇

『和田の歴史』を飾る「向坂逸郎」

―向坂逸郎先生、百瀬嘉郎さん、平林六彌校長のことども―

中澤 秀行：9

読者からのおたより

・・・・・・・・・・・・・・・・

旬刊社会通信

NO.1353

二〇二二年二月一日号

二〇二二年二月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

出 会 い、 国 鉄 闘 争 と 連 帯 す る 会

岩井章さん生誕100年、没25年(1)

岩井章さん

今なお尊敬してやまない、岩井章さんが亡くなって2月18日で25年になるのか、健在なら今日の労働運動・社会主義運動について何と提言されるのだろうか。ここ数年、岩井さんの本は手持ちの物だけでなく、滝野さんに譲って頂いた物を含め沢山読んでいる。机上には、常時持ち歩いている『共産党宣言』『空想より科学』をはじめ『資本論』とともに、向坂逸郎、灰原茂雄らの著書と岩井さんの本が10冊程度目の前にあり、私の中に生き続けている。

民間企業の御用組合の活動家であった私にとって、岩井さんは雲の上の存在であった。1988年の「連帯する会」の結成前後から、1997年に亡くなるまでの10年余は濃密な時間を過ごさせて頂いた。74歳の若さで亡くなった岩井さんの歳をはるかに越えた今、思い出は尽きないし、感謝しつつ教えを忠実に後世に伝えていきたいと思う。

生まれが1922年(大正11年)4月25日だから、生誕100年を迎えることになった。私から改めて紹介するまでもなく、岩井さんは長野県松本市で生まれ1937年15歳で国鉄上諏訪機関区に就職。1943年陸軍に召集され1946年1月復員、同年12月から国労運動に参画し、その後、甲府支部委員長、長野地本副委員長を歴任し、総評結成大会にも参加。1951年、29歳で国労本部役員に就任し、1955年7月の総評第6回大会で33歳の若さで事務局長に就任した。

春闘体制を確立したことは良く知られているが、中小労組、地域労働運動の組織強化のため「中小オルグ制度」を創設した。1958年に合化労連の太田薫氏(宇部室素・現宇部興産出身)が議長に就任し、「太田・岩井ライン」といわれた強力な指導体制のもと、60年安保闘争、三池闘争に尽力された。1964年には官公労働者賃金の民間準拠方式を確立した。

その後、1965年の日韓闘争、1966年「10・21ベトナム反戦スト」を組織し、1975年のベトナムの勝利、米軍の撤退まで「10・21反戦デー」は毎年続いた。

1970年8月、総評第40回大会で事務局長を辞任し、1970年のレーニン平和賞の副賞を基に1971年5月、国際労働運動研究協会を設立し、中国そして「北朝鮮」を中心とする国際連帯と労働者教育に尽力された。

1973年2月、国労が反マル生闘争の総括をもとに組合員教育を強化するため伊豆大川に「国労教育センター」を設立したのを受け、初代学校長に就任。そのご、総評解散に反対し、「労研センター」を創設するなどした。この間、総評顧問、国労顧問の任にもあった。

また、1951年の社会主義協会結成に参加、1996年新社会党の結党に協力し党員となった。

あまり知られていないが、岩井さんは1947年4月、25歳の時、長野県諏訪地区の議長の任にあり、長野県議会議員に立候補（落選）している。議員に立候補したのは、これが初めて最後であった。総評事務局長を退任後、国会議員への転身を何度となく説得されても、首を縦に振ることはなかった。この件について岩井さんが言われたことを後述する。

県会議員選挙闘争で、その中心を担ったのが、私の友人Tさん（昭和電工・中央研究所の活動家）の父親だった。Tさんの父親は若くして亡くなり、それ以降、岩井さんが文字通り親代わりとなり、事務局長時代に彼の仲人を務めている。私の地元の市原市は京葉工業コンビナートの中心に位置し大企業の工場が集中している。市原地区労青年部の中心的存在であった昭和電工のNさんはTさんを通じて、1969年地区労青年部の春闘討論集会で岩井さんの講演を実現した。そんなわけで、Tさんは岩井さんが「国際労研」創設後も国労会館の事務所を度々訪ねていた。

1971年の「国際労研」結成と共に、向坂先生の紹介で入局した滝野忠さんは事務所を度々訪ねるTさんに、研究所の若い仲間の学習会を勧め、小さな学習会を定期的に開催していた。テキストは『労働者の世界観』（向坂逸郎著）だと記憶している。このことをTさんから耳にし、国労会館の「国際労研」（岩井事務所）を訪ねたのが私と滝野さんとの出会いである。従って、交友は50年以上にもなる。今でも滝野さんとの出会いは鮮明に覚えている。

池本柳次さん

当時の昭和電工・千葉の組合は約1600人、青年労働者が多かった。社会党・社青同の活動をはじめて2年、当時、国労青年部長の池本柳次さん（現・北海道議会議員）の集会における演説に驚いた。その内容と迫力に圧倒され、これが日本最強の国労か、と国労への憧れを抱いた。青婦部を掌握した私たちは滝野さんに懇願して、昭和電工千葉の青婦部の学習会の講師に池本青年部長を招くことに成功した。工場内の組合会議室は満席となった。会社、組合は「現役の国労青年部長が来る」「どんなルートで来るようになったのか」「何を話すのか」大騒ぎであった。学習会後、中華屋で交流会を持った。私たちは本物の労働運動に出会ったのである。同時に運動に自信のようなもの、展望のようなものが見えてきたのを昨日のように鮮明に脳裏に焼き付いている。

池本さんとは親交が続つき、それ以来毎年のように帯広を訪ねている。感謝に耐えない。池本さんは、後に十勝地区労の事務局長、議長の任に就き、岩井さん、滝野さんを学習会に度々招いていた。国鉄闘争時に岩井さんが旅の中で「池本君は国労の書記長になってほしかった」と、ポツリと言ったことを思い出す。

「連帯する会」結成

私は39歳（1982年）で会社を退職し「権利問題研究会」（福田徹代表）の専従事務局長の任に3年就き、1985年事務局長を辞任し地元の運動に戻りつつあった。その後も講演活動は続けていた。1987年国鉄の分割・民営化が現実のものとなり、講演で得られた旅費・講演料などを元手に解雇された仲間とで連れだって、昭和電工

千葉の解雇撤回闘争の支援を訴えながら国鉄清算事業団の激励を続けていた。

そんな矢先、滝野さんから「暇なんだろうから国労支援の『国民会議』を手伝って」と声を掛けられ、「国鉄祭り」など少しばかりの手伝いをしていた。国労は1986年10月の第50回大会(修善寺)で主流派が脱退。1988年、岩井さんは月刊誌『国際労働運動』誌で国労支援について具体的に問題提起された。国労は同年7月の第52回大会で「清算事業団闘争本部」設置が決定され具体的に岩井提案の「連帯する会」構想の実現に動き出した。

国労本部の中執・小島忠夫さんから「お会いしたい」との電話があり、国労本部を訪ねたのは7月下旬のことであった。小島さんとは初対面であった。当時、国労本部役員で顔を知っていたのは宮坂要書記長、渡辺和彦さん、稲石馨さん、新井修一さん。職員(書記)では中村譲さん、樋口俊土さんらごく少数であった。小島さんに私を紹介したのが滝野さんであったことは闘争終結後に小島さんから聞かされた。

小島さんから「岩井さんが提起している『連帯する会』構想について具体的に組みたい。協力願いたい」というものであった。私は軽い気持ちで半年程度、会が軌道に乗るまでお手伝いしましょう、と返事。小島さんが何やら電話していて「岩井さんが待っているので岩井事務所(八重洲)に行つて欲しい」と。小島さんとは詳しく話をする間もなく、明日また来ます、と言つて岩井事務所に行き、岩井さんと対面した。岩井さんは「君のことは良く聞いている。君がやってくれるんだね。困ったことは何でも言つて来て、後は頼んだよ」と。

翌日、国労本部の小島さんを訪ね、稲田委員長、宮坂書記長らと面会、既定の事実かのように何となく「連帯する会」結成の準備作業に就くことになった。ここからが岩井さんとの本格的なお付き合いが続くことになる。(つづく 山下俊幸)

労働運動 (春闘) 再構築

―日本労働運動の過去・現在・未来―

22春闘

22春闘である。結果は見えている。政府権力と財界は、労働者、労働組合から階級性(労働者思想)を奪いとるため、学習と実践を休むことなく推し進める。ダラ幹・大企業労働組合は金魚のフンとある。金魚は大資本である。コロナは資本の合理化をいつきよに加速させた。「会社が生き残るためには」と、労資が手を取り合つて推進する。職場は地獄となった。

私鉄総連は階級的労働運動の伝統を残す数少ない労組の一つである。『人への投資』で魅力ある産業へ 未来(あす)へつなげる22春闘―政治強化 交通政策要求実現―と大書された春闘職場討議案にびっくりした。「私鉄春闘の基本的な考え方」は正直すぎるほど正直に、要求を切り下げるわけを打ち明けていたからだ。

『賃金とは何か』という概念を考えれば、22春闘において、以前と同様に生活の維持・向上を、雇用主である企業に対して、何一つ臆することなく、正々堂々と要求することは当然です。しかし、通勤・通学の減少、観光業をはじめ日本経済全

体に好影響をあたえていたインバウンドの喪失など、私たちの産業に対する感染症の影響が依然として残っており、いまだ回復途上となっております。

このことから、22春闘において、20春闘までと同じ要求を掲げることは難しいと言わざるを得ません。しかし、元々恵まれているとは言えない賃金が、特に他産業と比べてさらに格差が拡大している事実は、要員が不足している実態を解消する意味からも、放置することはできません。したがって、22春闘においては、私鉄春闘の再構築に向けた第一歩と位置づけ、組合員の生活を守るためにも、賃金の回復と格差の是正に向け、今春闘に限る特例的な要求を掲げ、全ての組合が私鉄総連に結集し、一致団結して22春闘をたたかいます。」(方針案12〜13頁)

私鉄春闘の再構築にむけた第一歩として「今春闘に限る特例的な要求」を掲げるという。「特例的な」要求とは、21春闘でもそうだったが、22春闘でも、生活回復・向上分は要求しない。賃上げ要求は定昇相当分2・0%とベア分1500円にするというのである。総連は「一致団結して22春闘をたたかいます」と気張ってみせる。空元気も必要だ。本場に再構築の「一歩」を考えるなら、当面の情勢にふりまわされた、その日暮らしの付け焼き刃の方針でごまかすのはためである。こんにちの右傾化の流れをつくった1970年代の政治、経済の、労働運動を中心にふり返ることである。歴史を軽んじ、時の流れに身をまかせ、群れて流れるだけでは歴史はつくれない。労働組合、労働者階級とはなにか。原則的観点からはじめたい。

労働者階級 労働組合と政党

労働組合は資本主義の矛盾のあらわれーあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度の増大に抗して自然発生的に生まれた労働者の組織である。資本家の横暴、弾圧、腐敗に抗し、農民、労働者、自営業者(商工業主)は反抗し、知識階級の一部の人は「共産主義社会」を夢想した。社会主義、共産主義の思想は、牧歌的な封建的秩序崩壊とともに生まれた。空想的社会主義者とマルクスとエンゲルスが呼んだオーエン、フーリエ、サン・シモンといった天才たちである。マルクスとエンゲルスは唯物論的歴史観(唯物史観、唯物弁証法)を適応し、資本主義が社会主義への革命的な移行は必然的であること、移行の歴史的主体は労働者階級であることを発見した。「科学」であるゆえんである。

労働者階級の組織と力は、労働組合そして社会主義政党の組織力、質そして量と規律として発現する。労働組合と社会主義政党は、ともに労働者、労働者階級の組織である。労働組合と社会主義政党が協力、連携し闘い、搾取からの解放をめざすが階級的労働運動である。

社会主義政党は労働運動の前進、発展のなかでつくられた、社会変革の中心勢力ー階級ーは労働者階級。労働運動の階級的成長、労働者階級としての自覚の高まりが、社会主義政党をつくり、発展、成長させる。

労働運動、社会主義政党の前進は、資本の支配を脅かした。1960年代、1970年代がそうであった。資本家とその政治権力は労働者を分断、分裂するため国家権力を動員する。弾圧、買収である。労資関係の成立とともに資本の管理と支配は巧み

になった。議会制民主主義の今は生まれてから墓に入るまでの思想攻撃とアメとムチの労務管理―アメは少なくなった―である。コロナ恐慌下の今がそうである。

労働運動 ―二つの潮流

資本家は労働者とは利害を異にすることを本能的に知っている。だから、労働者の反抗、抵抗運動にてつて的に抵抗、反抗する。労働者を「良い子」、「悪い子」「普通の子」と区分けし多様に管理する、「悪い」労働者と労働組合はぶったたけ、排除しろ、資本派をふやせ、会社組合つくれと。こうして、労働運動に二つの流れが生まれる。

一つは、「資本と仲よく」の流れだ、資本主義は私有制を特徴とする。私有制は競争を生み、矛盾をつくる。この流れは、「資本主義の改良だ、よりよい資本主義、労働者が幸せになれる資本主義」をめざせと、ドラ声を上げる。諸悪の根源である私有制の廃棄は一切考えぬ。改良は労働者階級の生活を多少は改善する。しかし、矛盾は労働者にかたちを変え襲いかかる。くり返しである。

二つは、「資本をやつつける」の流れである。マルクス・エンゲルスの搾取論―剰余価値論―を政策（方針）の基礎とする。貧困、格差の根っ子は私有制にもとづく搾取にある。ここを革命しなくては労働者のくらしの安定、幸せはない。

この二つの流れの歴史はこうである。前者は資本家が労働者に介入しつくる。後者は自覚した労働者、社会主義者が労働者とともにつくる。この二つの流れは資本主義が一九世紀に生まれてからの万国共通の流れである。現代世界は資本主義社会であるからだ。日本の労働運動史はこうである。

前者は労資協調。労働者と資本家に対立はない、分配は「分け前」があつてこそ確実になる、生産に協力し富をふやそう、そして分配してもらおう。この流れは産業報國となる。産業報國は撃ちてしまんに発展する。戦争である。現代、この流れは自民党とともに憲法9条をなくしてしまいたい、中国や北朝鮮の脅威に抗するには「敵基地攻撃能力」と武力行使とへひろがつていく。レーニンが強調した日和見主義的労働運動から社会排外主義へである。

後者は階級的労働運動。公明、維新、国民が予備軍である。資本との攻防の最大のは職場・生産点にある。そこで毎日、資本との攻防をくり返す、たたかいとまなびが労働者の組織と力、意識をつくる、労働者と資本家の対立・抗争するという階級的自覚をつくる。労働組合は、こうして社会主義政党との連携で社会革命の学校となる。世界史にあるこの道は、レーニンが指導したロシア革命とソ連邦への前進発展、いわゆる「冷戦」体制である。

労戦再編

労戦再編はこの二つの流れを再編した。前者の塊である同盟とJCは、総評労働運動へのアンチテーゼとして民社党をつくった。後者は総評・社会党ブロックとしてあった。あとに述べるが労戦再編と政界再編は「総評・社会党ブロック」を解体し、「連合・民社党」ブロックの保守二党制を目的とした。われわれは、保守二党制は幻想、保守一党支配になると批判した。

連合は国家のあり方をめぐり大きな矛盾を抱えつくられた。安全保障と外交政策、

同盟政策としての日米安保、教育、原発である。連合はこれら問題を棚上げした。矛盾はこれほど深く厚く激しい。歴史はくり返す。立憲民主と国民民主の旧民主の分裂で再燃した。立憲は改憲、原発推進に「消極的」。支持基盤が旧総評系の公務員組合にあること、インテリ・知識人に宣伝をたよっていることが大きい。この層は共産の支持層と一致する。だから、枝野さんは共産との共闘に舵を切った。これと正反對なのが国民民主党、この党は大企業労組を支持母体とする。(つづく 滝野 忠)

経営者やブルジョア経済学者と資本主義的合理化

―カール・マルクスと向坂逸郎(5)―

生産性三原則、生産性向上に労働者を縛り付けている経営者やブルジョア経済学者の主張について、マルクスは次のように述べている。機械装置そのものと、その資本主義的使用とを明確に区別して、論理は明快である。(傍線は原)

「生活手段からの労働者の「遊離」にたいして、機械装置そのものには責任はない、ということとは疑いえない事実である。機械装置は、それがとらえる部門の生産物を低廉にし、増加させるのであって、他の産業部門において生産される生活手段量を、差当たりは変化させない。したがって、機械の採用後も社会は、非労働者によって浪費される年生産物の巨大な部分を全く別としても、駆逐された労働者のための同量、またはより多量の生活手段を持っている。そしてこれが経済学的弁明論の眼目なのだ！機械装置の資本主義的使用と不可分な矛盾や敵対関係は、存在しない。それらは機械装置そのものからではなく、その資本主義的使用から生ずるのだから！したがって、それ自体として見られた機械装置は、労働時間を短縮するが、資本主義的に使用されれば、労働日を延長し、それ自体としては労働を軽減するが、資本主義的に使用されれば、労働の強度を高め、それ自体としては自然力に対する人間の勝利であるが、資本主義的に使用されれば、自然力によって人間を屈服し、それ自体としては生産者の富を増すが、資本主義的に使用されれば生産者を貧民化する等々の理由から、ブルジョア経済学者は簡単に断言する。それ自体としての機械装置の考察が明確に証示することは、すべてかの明瞭な矛盾は、卑俗な現実の単なる仮象であって、それ自体としては、したがって理論においても、全然存在しないものである、ということである、と。かくして、彼はこれ以上頭を悩ますことを惜しむのみではなく、なおそのうえに、機械装置の資本主義的利用を攻撃しないで、機械装置そのものを攻撃するという愚を、彼の反対者に負わせるのである。

機械装置の資本主義的使用からは一時的な不都合が生ずるということは、ブルジョア経済学者も決して否定はしない。しかし、裏のないメダルがどこにあるう！資本主義的利用以外の機械装置の利用は、彼にとつては不可能である。したがって、機械による労働者の搾取は、彼にとつては労働者による機械の利用と同じことである。ゆえに、機械装置の資本主義的使用が、現実にかなる状態にあるかを暴露する者は、機械の使用一般を欲しない者であり、社会的進歩の敵であるのだ！全く有名な首切り犯人ビル・サイクスの論法そのままである。「陪審員諸公、この行商人の首は確か

に切った。しかしこの事実は私の罪ではない。それは刀の罪である。われわれはかかる時折の不都合のゆえに、刀の使用をやめるべきであろうか？ よく考えてみられよ！ 刀なくして農工業があるうか？ それは外科手術では治療をなし、解剖では知識を与えるではないか？ その上に、楽しい食卓の調法な助手ではないか？ 刀を廃する——それはわれわれを、野蠻のどん底に投げ返すことである。」（『資本論』岩波文庫版② 438〜439頁）

資本と協調する連合幹部とともに、労働者がこのようなブルジョア経済学者の主張に惑わされている限り、ストライキを構えた大幅賃上げも、労働時間短縮も、生産性向上・合理化反対も、非正規労働者の正規化も、闘うことはできない。

我々はマルクスを学ぶことによって、機械装置の資本主義的利用の内実を知り、それと根本的に異なる社会主義的利用——より多くの搾取のための利用ではなく、自分たちのより豊かな生活のための利用を実現できることを認識し、そのために闘う。

問題の核心は、斎藤幸平君の言うように、経済成長が良いか悪いか、ではない。

我々は、人間労働のより大きな搾取のための経済成長、独占資本が資本蓄積を増やすための経済成長⇨労働者国民に窮乏、失業、環境破壊等々で犠牲を強いる経済成長には反対するほかはない。収奪者（独占資本）を収奪して、生産手段を労働者国民の共有物に転化することによって、はじめて自分たちのための経済成長が可能となる。

独占資本の支配するもとで、斎藤君の言うようにいかにコモンを作ってみても、資本主義から脱却することはできず、自然力によって人間を屈服する資本主義的経済成長、資本主義的合理化から解放されることはないし、労働者国民の失業や窮乏をなくすることはできない。（原野人）

「原発」今や日本の焦点！

―目に見え、耳に聴こえる運動に―

吹雪の中を行く

膳所で行われる脱原発市民ウォーク in 滋賀のデモが10年を超え100回目を迎え、この間、「老朽原発うごかすな」の大阪での3回大集会ではいずれも1300〜1600人を超える参加を得、また、美浜3号機再稼働阻止の現地行動もだんだん参加者が増えつつある状況の中、運動的に滋賀湖東地区での運動の拡がりを求める声も多くあり、京都・大阪を凌ぐ運動拠点が求められています。

この背景から、膳所の呼びかけ人とも相談しながら、西村しずえさんと沢井清をよびかけ人とし、滋賀湖東の近江八幡で「脱原発市民ウォーク in しが近江八幡2021」のデモを始めることにしました。10月30日を第1回とし、毎月1回で今年3回のデモを実施しました。

第1回は30名の参加をいただき、第2回は子どもさん連れの参加で層の厚さを示し、第3回目は雪とみぞれの中開催しました。大津・膳所の市民ウォークの呼びかけ

人の岡田啓子さんは「参加者が少なくなっても続けることが大事」と励まされていたきました。今、原発は日本の焦点にもなっています。

3・11を反省し、放射能被害から民衆を守るため、さらに、地球環境をも守るために脱原発に舵を切るのか、危険な原発や老朽原発をそのままにし、手出しのできない放射能被害を地域住民に押し付け、電力会社や原発関連企業を儲けさせるのか。と問われています。

3・11以降ドイツでは1ヶ月後原発廃炉の方針を決定しています。この他、世界各国でも脱原発の流れになって、最近では、台湾第4原発が国民投票で否決されています。原発については市民のほとんどが賛成していません。しかし、これを「目に見え、声で聴こえる」ようにする必要があります。小さいながら、自信をもって近江八幡デモを続けたいと考えています。

(第3回脱原発市民ウオークinしが近江八幡 2021年12月18日 沢井清)

さいなら原発・びわこネットワーク「第11回総会&記念講演会」

◇日時 2022年2月19日(土) 14時～16時30分

◇場所 自治労滋賀会館会議室(県庁前 NHK大津放送局 通り挟んで北向い)

◇参加費 会員は参加費無料、会員外は500円 お願いします。

※ 総会・記念講演はどなたでも参加可能。

◇講師 ノーニクス・アジアフォーラム・ジャパン 佐藤大介事務局長

◇テーマ 台湾第4原発国民投票で否決、アジア初の脱原発国へ！

若狭の老朽原発もこのまま廃炉！

(『さいなら原発・びわこネットワーク』ニュース第62号 稲村守方)

◇信州松本通信◇

『和田の歴史』を飾る「前九州大学教授 向坂逸郎」

向坂逸郎先生、百瀬嘉郎さん、平林六彌校長のことども

(一) はじめに

松本市に、和田という地区があります。昭和29年の市町村大合併の折、東筑摩郡和田村が、松本市に合併されて現在に至っています。この和田地区の歴史を一冊にした『和田の歴史』(松本市和田地区歴史資料編纂会、平成7年2月刊)という大層な著書があります。

第一篇「古代・中世の和田郷」、第二編「近世の和田八か村」、第三篇「近代・現代の和田村と松本市和田」、という構成になっています。

(二) 『和田の歴史』に登場する向坂逸郎先生

第三篇の第二章「和田村役場による村政と村民生活」の第二節「十五年戦争下と敗戦後の和田村政・村民」の四として、「青年会運動・満州開拓と戦後の公民館活動」があり、私の注目の第一は、このなかの「和田村連合青年会の活動」の項であり、次のように向坂逸郎先生が登場します。

「和田村の青年にとって、農村・農業のありかたは依然として問題であった。(昭和)十年一月十五日から松本市で開催された農家経営講習会に、和田連青は、奥村精一・中野信次郎を推薦し、一月二十九日午後七時からの秋季講習会は、前九州帝国大学教授向坂逸郎の『農村問題に関する各論説批判』という極めて『論理的』な二時間にわたる公演を、約三〇〇人が聴いた。また、二月三日の全村の研究大会は、八〇人が参加し、『農村経済の統制化について』(南和田)、『現状ニ鑑ミ現在ヨリ農村経済ヲ何ニテ得ルカ』(町)、『桑園整理と其ノ後ノ代作物』(殿)、『農村疲弊ノ原因ヲ救命シ其ノ更生策如何』(中)、『研究会ノ効果ノ有無ニ就テ』(衣外)、『村連青ノ事業ノ改革ヲ論ズ』(蘇我)、『青年団運動の更生策如何』(下和田)などを検討した。農村不況が依然としてきびしかったことがうかがえる。」(『和田の歴史』705〜706頁)

〔註〕「近代・現代の和田」の執筆者は、当時信州大学教養部教授の上條宏之先生です。

上條先生は高校時代隣のクラス(三組)の担任で日本史を教えておられました。私が二年生になる時に長野県史編集委員として県庁へ出向されてしまいました。

向坂逸郎先生は家永三郎先生との対談を残されています(『現代日本の教育と教科書裁判』向坂逸郎著『教師と教育』所収)が、上條先生は家永ゼミの出身です。そんなこともあったのでしょうか、上條先生が担当した私の一学年上の日本史のテキストは、かの家永三郎著のものだったそうです。

昭和10年1月19日に、和田地区では秋季講習会(「中澤註」秋から冬にかけての農閑期の講習会をこのように呼称していました)ということとで、「前九州帝国大学教授向坂逸郎の『農村問題に関する各論説批判』という極めて『論理的』な二時間にわたる公演を、約300人が聴いた。」というのです。『地代論研究』は改造社から昭和8年2月に刊行されていますから、これを土台に農民に語りかけたのだろうと思われます。

戦後、向坂先生が百瀬嘉郎さんに宛てた葉書で、自著『地代論研究』についてコメントされています。曰く「当時いっしょうけんめいやった論争です。僕自身としては一番気に入っている本の一冊です。」と。百瀬さんによりますと、これは「等々力からもらった最後の葉書」ということでした。この葉書は百瀬さんからいただきました。現在私の手許にある貴重な資料です。

昭和五年春に、東筑摩郡連合青年会会長に就任した百瀬嘉郎さんが、その年の晩秋から冬にむかう農閑期に、講師を連れて東筑摩郡下の村々を巡回しての講演会、いわゆる巡回講演会をスタートさせます。その最初の講師が向坂逸郎先生だったので、百瀬さんによりますと、初年度に回ったのは、片丘村、洗馬村、山形村の三か村だったそうで、資本主義社会の仕組みについて話されたそうです。そんなわけでして、昭和10年の和田村での講演会は、これの延長線上にあったと思われる。

昭和12年4月の第20回総選挙では、松本地区では近代的労働運動の父と言われた棚橋小虎が立候補し、その選挙事務長を百瀬嘉郎さんが務めますが、次点で落選してしまいます。投票日直前の3月14日、和田村連合青年会の春季総会での講演会講師は棚橋小虎でした。150人が耳を傾けたというこの演題は「準戦時体制と国民生活安定」というものでした。おそらく、選挙に関連して行われた講演会と思われる。

(三) 『和田の歴史』での青年会（青年団）の講演会の講師陣

↳ 百瀬嘉郎さん、小原元亨先生、平林六彌先生について ↳

次に注目したのは、前述の和田村連合青年会は（戦後は同青年団として）戦前の講演会を継続して開催しているということについてです。

〔1〕 百瀬嘉郎さんの講座

昭和23年に実施した事業の中に、3月1日〜7日にかけて7回の夜学講座が開催されています。その6回目の講師は百瀬嘉郎さんでして、演題は「資本主義と社会主義」とありますから、向坂理論を学んでいた百瀬さんの面目躍如ということでしょう。

〔2〕 小原元亨先生の講座

昭和24年2月4日には、学生会主催（和田村連合青年会後援）の講演会が開催され、小原元亨先生（当時松本深志高校教諭Ⅱ世界史・英語）が「資本主義の分析と社会主義に就て」と題して、和田小学校の裁縫室で講演しています。

私の学生時代に隣の経済学部で経済原論を担当していたいわゆる宇野派の経済学者である降旗節夫教授は、「社会科学系の文献により牽かれて、社会科学研究会を立ち上げた。顧問は小原元亨先生。テキストは櫛田民蔵の価値論や小泉信三の社会思想史だった」と記していますし、またこうしたことから、「東大大学院を目指し、そこで宇野弘蔵に教わりたいと考えるようになった」旨を、松本深志高校の『PTA通信』（2008年7月）に記しています。

また、この『通信』を読むと、降旗教授は映画監督の熊井啓さんやテレビマンユニオンのプロデューサー萩元晴彦さんとは、親友だったようです。萩元さんからは「いい学校でいい教育を受けたと心から思っている」という葉書をもらっているそうです。

〔3〕 平林六彌先生の講座

昭和24年は講座の続きとして3月4日から10日まで、同じ場所で教養講座が開かれています。最終日には「松本深志高校 平林六彌先生」が、「愛の本質」という演題で講演したことが記されています。この講演会は六彌先生のことですから、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の「第二章 家族」に依拠した講座だったと思われず。「第二章 家族」は、史的唯物論による家族史ですが、それはマルクス・エンゲルスの恋愛論でもありません。

高校時代に受けた六彌先生の衝撃の授業については、別稿を考えていますが、六彌先生は、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』、『反デューリング論』、レーニンの『帝国主義論』を読んでいたことは間違いないでしょう。

小原先生は昭和20年代に、旧制松本中学から新制松本深志高校に移行する時代、世界史と英語を教えておられました。同じく平林先生（私の高校二年後半から三年時の校長、そして平林先生の後任の校長は小原先生でした。）は世界史を教えています。また、日本史の担当は清水和彦先生（私の高校三年間の教頭。県教組の専従役員もしていたそうです。）でした。三人とも東大出の秀才でした。

こうした歴史の教師陣について、当時の教え子の一人である佐藤玲子さん（戦後日本に学芸員制度ができ、その学芸員の第一期生でした。松本市の職員として就職し、

松本市立博物館館長で退職されましたが、女性の管理職第一号の一人でした。郷土史研究家で美術史には特に明るく、石井柏亭の四女ゆたかさんとは本当に親しく交流されました。は、「当時の歴史の先生は『唯物史観』で教えていた。」と語っています。

(四) 私のなかの平林六彌校長

「1」六彌先生との出会い

高校二年時の10月に着任した平林六彌校長ですが、着任直後から世界史の授業を12月末まで受けました。三ヶ月の授業は正しく衝撃の連続でした。前述のように詳細は別稿とさせていただきたく考えています。

「2」六彌先生の初めての授業

初めての授業の時、六彌先生は授業の冒頭、自分の教え子である中村磐根（バンコン）先生のお蔭で教壇に立てたことに感謝する旨の挨拶に続いて、熱っぽく「なぜ歴史の勉強が必要なのか！」と、次のように話されました。

※※※

君達は世界史を勉強する時、何年にどんな事件があったかを正確に覚えて答案用紙を埋めれば、大学入試は突破できるだろう。しかし、これが世界史の勉強だと君達が思っているとしたら、大いなる間違いだ。本当はそんなことが大切なのではない。人間は他の動物と違って歴史と文化がある。人間の歴史がどこから来て、今どこにいて、これからどこに向かっていくのか、歴史を勉強する本当の理由はここにある。だから歴史の流れを知っておくということが重要だ。先ず教科書（今も当時のものが手元にあります。山川出版の『詳説 世界史』がテキストで、昭和43年3月5日発行、定価182円とあります。総ページ数は「395」です。）の序を読みなさい、大切なことが記されている。各章の冒頭の概観では、その章の流れが記されている。概観を常に読み返すことを勧める。歴史を勉強することにより、人間社会の様々な問題を取り上げて正しく解決しようとするには、各々の問題に対して歴史を遡って歴史的に回顧することが大切だということがわかれると思う。君達が、いずれ社会に出て歴史に對し責任を持って生きなくてはならなくなる時、歴史に学ぶことの大切さがわかるようになるのではないか。……

※※※

一時限の授業、それは伝統的に65分の授業でしたが、あつという間に過ぎたことを覚えています。「何のために『歴史』を学ぶのか」、私にとつては本当に説得力のある授業でした。大学に行くなら、歴史の勉強をしようと思うようになったのも、こうした授業を受けたからに外なりません。

☆☆☆

2021年11月3日脱稿の【『和田の歴史』を飾る「前九州大学教授 向坂逸郎」拙稿を、『社会通信』掲載に当たり抜粋し手を加えました。

『和田の歴史』に向坂先生が登場する事を教えていただき、またこの大著を貸していただいた職場の先輩である上條源道さんには、この場を借りてお礼申し上げます。

2022年1月14日

信州松本 歴史記録係 中澤 秀行

◇読者からのおたより◇

前を向いて今年こそはと張り切り出発するのですが、暗いニュースで終止してしまい、人生幾ばくかなと下向きになる時がありますが、前を向き直し、人生を楽しまなければと思うこの頃です。

(福島県相馬市黒木 國分富夫)

真に新しい時代を切り開くには

『人新世の「資本論」』などという本が何十万部も売れているということは、資本主義が労働者国民にいかにか犠牲を強いる時代になっているか、人々がいかにか新しい社会を模索しているかを示しています。

真に新しい時代を切り開くにはこのような『資本論』の核心を否定する本ではなく、マルクス・向坂の本物の『資本論』が読まれなくてはならないこと、その読書会が全国につくられるべきことを教えています。そのためにも『社会通信』の活用・拡散が期待されます。(東京 多摩市 原野人) ネット〃社会通信〃ありがとう あちこち痛むが、何とか暮らしています。

(東京 世田谷区 三木信之介)

いつもネット〃社会通信〃ありがとうございます。

元気を頂き 素敵な紙面のご惠送、素晴らしき。ご奮闘に、元気を頂いております。(柳田祥子)

「アスベスト被害の完全救済に向けて」石綿被害救済制度研究会の2つの提言を学ぶ学習講演会、ユーチューブで見られます(※)。「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」では、格差と隙間をなくせ！認定基準のみなおし！治療研究促進！時効撤廃！の訴え(全労協全国一般東京労働組合 日本エンタニットパルプ分会) (※) <https://www.youtube.com/watch?v=D6W-Wo-yB1k>

「公助の」政治に 新型コロナ感染の最中にも、軍事費増強、福祉費切り下げが続いています。貧困に手を差し伸べる「公助の」政治に変えたいものです。(東京練馬区 秦康博)

月ヶ瀬梅溪 今年も病とコロナに抗して元気で新年を迎えました。いのち・人権・平和を大切に。する歴史を創りましょう。そのために人間の尊厳を大切に。する憲法を生かしましょう。

今年、月ヶ瀬梅溪が国の名勝指定を受け100周年です。月ヶ瀬の梅と歴史をガイドします。どうぞ連絡を。(追伸) 大杉栄も来ているのですよ。(奈良市 稲葉耕一)

働き方 60年前 三条市で働く事になり、新津市から通勤の日々。今年4月1日は60年の節目。忘れもしないその日は日曜日だった。しかも朝7時の初出勤。新津から汽車に乗り、片道1時間近くかかる時代。朝5時前に起きて朝食。自宅から新津駅。さらに三条駅から勤務先の郵便局へ。片道1時間半から2時間の通勤距離。

乗り物酔いがひどく、自動車もバスも大キライの18歳。その苦痛は仕事と同じ位切なかった。小中高生の頃の修学旅行は楽しかった思い出はない。なにしろ宿で一人休む事が多かったのだから。

それも半年もたわずに**深夜勤務**をさせられる三交替16時間勤務。郵便内務の4部門の仕事覚えるのに必死だった。高度成長時代の若者は良く働いた。その頃の同僚・先輩20数名中、現在、男の平均寿命を超える生存者は2名しか知らない。あと20名位は70歳台で亡くなった人が圧倒的。しかも働き始めての3ヶ月間は「臨時補充員」という名のパート。年金手続きの時に初めて知る事となった。国家公務員とは名ばかりだった。最も局によっては先輩に恵まれ厚生年金をかけるようにしてもらい、年金に加算された人もいる。この職場で6年働く。

さて、今の働き方も似てきてますね。

(新潟 三条市 相田邦夫)

希望 2021年総選挙を経て、日本はかつてない危機を迎えています。「戦争する国」に絶対に対してはなりません。今こそ「人権・平和・民主主義」をしっかり守る人たちの輪を拡げていきたい。昨年のビデオプレスは、映像関係だけでなく有志企画の「あるくラジオ」を6回配信しました。

「国鉄闘争」をテーマにした森健一さんから始まり、根岸恵子さん・根津公子さん・指宿昭一さん、瀬山紀子さんと続き、12月には解雇撤回闘争中のJALパイロット山口宏弥さんを迎えました。かれ彼女らの話を通して日本の社会運動の課題が、そして希望も見えてきました。今年もやれることをコツコツやっていきたいと思えます。(東京 板橋区 ビデオプレス 松原明)

コロナ： コロナが新しい、より良い社会につながるというのですが！（埼玉県新座 佐々木有美）人は人と生きていく 浅間山雪化粧してご挨拶 人は人と生きていく（長野 佐久市 菅原須摩子）今日この頃 昨年、鹿児島島の九四歳の母が、高齢化でホームに入りました。今年も、コロナ禍の中ですが、注意しながら母への面会と趣味の登山、温泉、鉄道写真、そして「明るい農村」で過ごします。（追伸）母との面会はガラス越し。施設温か、顔艶良くホッと。（福岡県筑紫野市 神宮義秋）核ゴミ わが家、風連生活3年目で車庫移設・鶏小屋の建て直しと多少前進。コロナの間隙をぬって東京中部ブチ連帯する夕べ、国労宮城県支部絆の集いに参加。闘争終結から早や10年、支援の仲間の励ましに感謝。今年も、畑仕事と老朽納屋の取り壊しで終活準備？に着手。

幌延の核ゴミ問題にも力を込めて・・・を目標に励みます。（北海道名寄市風連町 田中博・廣子）**反弾圧元旦行動に 400名！ 大阪府警前へ関生の闘いは働く者の心へ**「大阪府警は謝罪しろ」「大阪府警は法律を守れ」のシュプレヒコールで午前10時、大阪府警前で行動は始まった。今年で4回目の労働組合つぶしの大弾圧を許さない実行委員会の元旦行動。

昨年12月13日、連帯ユニオン関生支部への、加茂生コン「事件」京都地裁不当判決を翻し、大阪高裁で無罪判決を獲得した。また、「組合員どうしの面会禁止」の保釈条件も緩和された。レイシストの悪意あるユーチューブの関生に関する動画も罰金と削除命令が出された。

「今年は流れを変えよう」と司会者の発言に続いて、関生支部湯川裕司委員長が「2018年8月から弾圧が始まったが、ようやく一部無罪判決が出ました。」と挨拶した。

続いて、関生弾圧支援する兵庫の会、名古屋から参加の東海の会、豊中市議木村真さんが連帯アピール。若狭の原発を考える会の木原壮林さんや反弾圧京滋実行委員会も発言。途中3回のシュプレヒコールと「法円坂55」グループによる弾圧抵抗歌。大阪全労協加盟組合の郵政ユニオン、日教組奈良市、介護労働組合、関西合同労組などさらに市民運動から、米軍Xバンドリーダー基地反対運動や部落解放運動などからも。異口同音に言われていたことは、関生の闘いを通じて、あたり前の労働組合の運動をして、働く者の要求を作り、労働者の立場や労働条件を改善しよう、会社や資本、国や権力に負けることのない運動を作り、関生の火が燎原のごとく拡がって働く者が報われる社会にしよう」と正午で行動は終わった。正しいことは勝つという自信がみなぎった集会だった。

（かんなま勝手連・しが 沢井清）

副議長としての半年 2021年5月の臨時議会で副議長に就任してから7ヶ月が経ちました。

コロナ禍で対外的な行事等に参加する機会は少ないですが、議会の中では各種会議・委員会等は通常どおりに開催されており、副議長として日々勉強しながら取り組んでいます。

初めてのことがばかりで緊張の日々が続いています。特に市議会本会議における議長代理の議事進行は緊張します。議場の議長席に座るだけでも身が引き締まる思いですが、そこから見える景色からは、与えられた議長代理という役割の重みが伝わってきます。

また、会派代表者会議、議事運営委員会、議会だより編集委員会委員長等責任のある仕事にもようやく慣れつつあります。与えられた任務を自分なりに誠実に取り組んでいきたいと思っています。私も議員になって18年目になりますが、これまで同じ議員を講師として迎えたことはありませんでした。今回は、副議長ということもあり、一期の会（12名）から学習会の講師依頼があり話をさせていただきました。学習会では立候補決意から今日までの18年の思いを伝え、今、取り組んでいる活動の一つである小学校での「絵本の読み聞かせ」を例として挙げ、その活動を通じて学んだことややりがい、これからの目標を話しました。また、これまで市民の相談がきっかけで実現できた要望や教育・福祉施策での提案等もふり返りながら、学習会を進めました。

私自身、これまでの活動を振り返る中で、前に進むことの大切さを改めて考えさせられました。そして、これまで以上に議員同士で協力し、議員力を高めつていくことの必要性を感じました。この経験をこれから議員生活に活かして、新たな課題に挑戦して行きたいと改めて感じました。

（広島県福山市議会議員 西本章）